

継続的だけではないネウボラを 見据えて

子育て家庭支援としてのベビーウェアリング支援

木村まゆ (独ベビーウェアリングコンサルタント、ディ・トラゲシューレ認定コンサルタント、親子心理カウンセラー、バースエドゥケーター)

ネウボラ(neuvola)とは

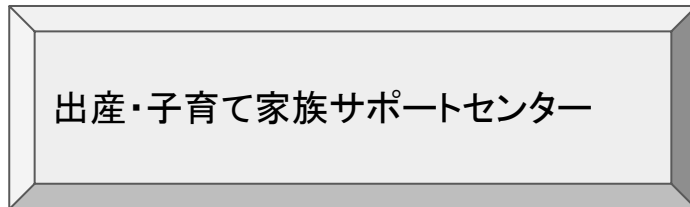
直訳＝助言・アドバイスの場

＜切れ目なく寄り添い支える制度＞

- ・対象期間 妊娠から就学前まで
- ・対象者 母子および家族全体(個別)
- ・対応 かかりつけの専門職(主に保健師)

＜身近なサポートを得られる地域の拠点でありワンストップな場所＞

様々な妊婦や家族を受け止め支援し、必要に応じて他職種や地域の民間グループなどとも連携する専門的な技能・力量をもつ「人」



※フィンランドの現状より

ベビーウェアリングとは？

道具を使って「抱っこ」「おんぶ」をすること。(国際的定義)

ベビーウェアリングコンサルティング

多角的な視点での研究・他業種間でのディスカッションに基づく理論と医学・発達心理が基盤

- ・生まれてすぐからの愛着形成・親子の相互作用のサポート
- ・呼吸機能が未熟な低月齢児のバイタル値安定姿勢
- ・股関節発育不全を防ぎ未来まで見通した健全を守る
- ・産後の親の身体を守り、両親の負担を減らし家族の余裕をつくる
- ・授乳を楽にしたり、赤ちゃんの睡眠導入のスムーズさや質を上げる etc...

親子の生涯を通しての健康・
親としての自信

困る前につながる・気軽に相談できる

どんな人にも必要な「抱っこ」や

多くの人が必要とする「ベビーウェアリング」「おんぶ」

を媒介・導入とすることで

＜早期・継続＞ 問題が発生・進行してしまう前に繋がってられる。

＜敷居の低さ＞ 身体の痛み、使い方がわからない等相談しやすい内容で入れる。

ただ関わることでの解消や、さらに裏側にある問題へと繋がることもできる

(「抱っこの問題解決」は「**母親**」の**気持ちをストレートに聞ける**媒体)


支援場所、支援方法は、本人が相談しやすいかどうか**が重要**

信頼関係(ラポール)の形成

問題のあるケースの親子が専門家を信頼するところが最難関

- ・誰もが気軽にいける場所／誰もが相談できる内容
 - 問題発見の場所でもなく、問題がある人だけが関わるものではない
 - 「**親子を楽にする**サービス」として認識されること。
- ・個別に話せることが**自然**であること
 - 抱っこおんぶの相談は必ず一人ひとりに関わるタイミングがある。

「事実として見えるものがどのようであっても、とにかく直接会ってはなしてみなければ、本人たちの状態はわからない。」(ネウボラポリシー)



辱めない。
肩身を狭くさせない。

ベビーウェアリング相談の継続性

アメリカの若年層の母親への研究において、抱っこへの継続支援が入ったことでの親子の愛着形成に対する優位差が認められた。

『乳幼児の社会的発達に対する抱っこひもの影響 still-face実験における乳幼児と母親の相互作用』
"The impact of infant carrying on infant social development: Infant mother interactions during the still face task"
Lela Rankin Williams, Ph.D. (アリゾナ州立大学准教授)

<継続が自然な理由>

- ・妊娠前に出産後すぐから始まる抱っこについて学ぶ必要性
(父親の子育て参加推進を含む)
- ・生まれた後産褥期まもなく親子に適した道具を選ぶ必要性
- ・実際に抱っこに関する問題は子育て期間中尽きない。
- ・おんぶに移行したいなど、定期的に変化する状況。

健やか親子21(第二次)課題にみる「抱っことその道具」1

厚生労働省としての親子への指針

成育医療等基本法にも

すべての国民が地域や家庭環境等の違いにかかわらず、
同じ水準の母子保健サービスが受けられること

→抱っこの仕方や育児は伝承されなくなり、商業のみが氾濫する中で高リスクだったり悩んでいたりする親子が増えている。

<基礎課題> **安心・安全な**妊娠・出産・育児のための切れ目ない妊産婦・乳幼児保健対策の充実

→ネットや雑誌をはじめ、産院においても**基準がなく**、得られる情報の質が親子へのリスクとなっている。実は、**助産師や医師にも体系的な知識や学びはない**。

健やか親子21(第二次)課題にみる「抱っことその道具」2

<重点課題の目標>

・親や子どもの**多様性を尊重し、それを支える社会の構築**

→ベビーウェアリング支援は 親の自信の回復、赤ちゃんとの相互作用の促進、親子自身が選択することをサポートするため「多様さの受け入れと支援」となる。

・**児童虐待のない社会の構築**

→抱っこが上手にできることは、**母乳育児**や**睡眠**につながる

→生まれた瞬間から、抱っこが人間の愛情構築システムと発達に影響することを「知っている」だけで内因性ホルモンによって**正常に親になる発達**が助けられる。

家族全体への支援

- ・夫婦(祖母連れ)で訪れる人も多い。

(特に抱っこ紐の選択や使い方クラス、新生児の抱き方クラス)

→父親の不安感を取り除いたり、産後の家族の協力体制を産前からつくることができる。

- ・父親と赤ちゃんとの絆形成が忘れられがち

→24時間体制で始まる母子の絆形成と違い、父親と子どもの絆形成は大幅に遅れていく。

→子どものお世話をしたいと思うモチベーションはオキシトシンによる「絆形成」が基盤。

義務感ではなく、養育者も幸せになれる育児スタート

抱っこは誰にでもできる赤ちゃんとの最初の多面的な非言語コミュニケーションであり、父親と子どもを早期につなぐ重要なチャンス

サポートの質

ベビーウェアリング支援導入時の注意点

<方法>

専門家でありながら、「指導」は決してしない。

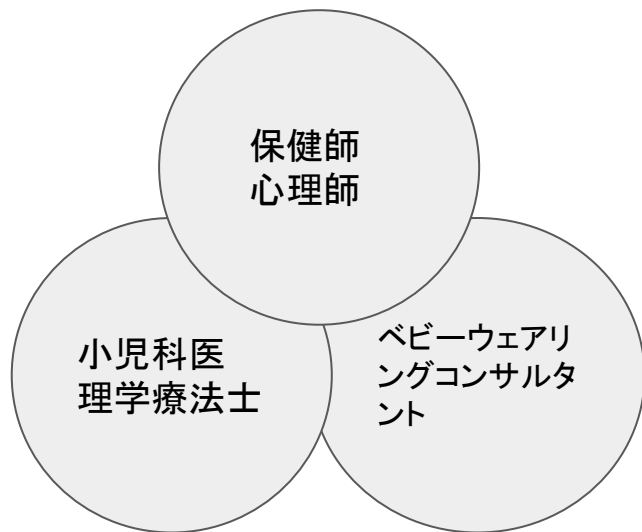
親子と同じ目線、寄り添う姿勢。

各々が専門分野に責任を持ち、専門家同士が連携。

<現状>

- ・抱っこの専門家ではない他の専門職による間違った「指導」
- ・医療従事者等が独自の目線で創作した「抱っこ」理論や道具販売のリスク
- ・多様性にあふれた現代の考え方、ツールへの対応情報の少なさ

行政や医療との連携が進む



欧州ではすでに、特別ニーズのお子様に対して民間の支援団体と医療・行政がチームになり問題解決に乗り出している。

特に人間の発達において「抱く」「抱かれる」という行為は心身の障害と深く関わるため、欧米資格のベビーウェアリングコンサルタントは大半が医療従事者であり、子どもの発達に関して専門的な知識を有し、相談者とのコミュニケーションスキルや責任も重視される。

エンパワメント(自立)の大切さ

<積極的傾聴・コミュニケーション能力が重要な理由>

- ・「親子の相互作用」を促す
 - 親が子どもに応える、子どもが親に頼る
 - 親自身が我が子の想いや異変を感じる力
- ・自身の思いや考えを口にできる力を引き出す
- ・親も子も尊重されること

支援者が主導的である場合、「自立」には至らない。

対話＝本人の力の回復

日本におけるネウボラをより効果的なものへ

「抱っこ」「おんぶ」大国の日本においてのベビーウェアリング支援の有用性

- ・多くの養育者が困っていながら、解決できる公的機関は皆無
- ・落下・窒息死亡事故も起き、小児外科医も警鐘を鳴らす事態

⇒ 今、注目されるサポートのひとつ

- ・継続的かつ個人相談的な支援である(高リスクの早期発見)
- ・養育者が自分について気軽に話せる相談内容(きっかけ)
- ・愛着形成・相互作用の促進、子どもの機嫌安定で子育ての自信ができる

⇒ 本当に必要なエンパワメント支援と早期対処